

# 中市 絶壁（なかいち・ぜっぺき）

## 1、プロフィール

中学時代より俳句経験があったが、河東碧梧桐系の俳誌「手捏（てづくね）」に参画し、絵画・思想の素養を生かした異色の俳論と柔軟で新味のある俳句を発表した。

<生没>

1887(明治 20)年8月 15 日 ~ 1942(昭和 17)年8月 26 日

<代表作>

『中市絶壁句集』

<青森との関わり>

野辺地に生まれ、実業につきながら、県内諸誌に評論・翻訳を発表、晩年は郷土史・民俗学にも成果をあげた。

## 2、作家解説

俳人。明治 20 年上北郡野辺地町に生まれる。本名は謙三。39 年青森県第三中学卒業、大正 3 年 5 月慶応義塾の理財科および新聞科卒業。大正 4 年俳誌「手捏（てづくね）」が野坂十二樓らによって創刊されると、彼もこれに参加、個性的な発刊の辞を書き、編集も手がけた。同誌は 6 年 6 月をもって中断、3 年後の 9 年 7 月に復刊し 10 年 9 月、通算 30 号で廃刊となる。絶壁の活躍の舞台は主として前期で、俳論らしからぬ俳論を書いた。主張の特長は、絵画論と当時の思想家・文芸家であるカント・ホイットマン・トルストイのものなどを採用して、伝統的季語のヒューマニズム化、自然の人間的解釈、俳句会における個人の自由、ライフとしての俳句の形成などを説いた。「手捏」誌上における貢献は、句作以上に評論にあるとも言える。碧梧桐理論の文化論化とも言える一面で荻原井泉水説に通う点もある。

句風は碧梧桐風の野坂十二樓の漢文脈的力強さはなく、独特の柔らかい自由さを見せ、軽妙さと象徴性とを見せる。ただし彼の理論が十分実現されているとはいえない。

彼の文化人としての活躍は多彩で、文学雑誌での評論・翻訳、晩年の郷土史・民俗学にも功績を残したように、俳句はその中の一面だといえる。昭和 17 年 8 月 26 日、本籍で死亡した。昭和 47 年句碑が野辺地町愛宕公園に建立され、その記念誌として『中市絶壁句集』が建設委員会によって発行された。碑面の句は「傘さげてみ堂をめぐる夕嵐」、裏面の碑文は淡谷悠蔵による。

### 3、資料紹介

#### ○『中市絶壁句集』

図書

1972(昭和 47)年 10 月 7 日

257mm×182mm

昭和 47 年 10 月 7 日(句碑除幕の日)発行。編者は梶原慶三、発行者は中市謙三句碑設立委員長山根恒次郎である。淡谷悠蔵・竹内俊吉の序文、略年譜、編者の後記を載せる。本文は「手捏」掲載の俳句(141 句)、9章の文、和歌4首、誌1篇から成る。